

研究・調査報告書

報告書番号	担当
29	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
An investigation of epidemiologic factors associated with large nodular goiter. 大きな結節性甲状腺腫に関連する要因の疫学的検討	
執筆者	
Phitayakorn R, Super DM, McHenry CR.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Surg Res. 2006 Jun 1;133(1):16-21.	
キーワード	
結節性甲状腺腫・人種・加齢・肥満・社会経済状況・飲酒	
要旨	
<p>背景： 散発性の結節性甲状腺腫は米国ではよく見られ、ある程度以上の大きさになると圧迫による重篤な症状を引き起こすことがある。</p> <p>方法： 片側性で50g以上あるいは両側性で100g以上のものを大きな結節性甲状腺腫と定義し、これに関連する可能性があると思われる要因を検討した。検討した項目は、年齢・性・人種・BMI・甲状腺疾患の家族歴・診断時の妊娠の有無・健康保険の状況・喫煙および飲酒の状況であった。データは倫理委員会が承認している甲状腺データベースおよび1990～2005年の間に結節性甲状腺腫の手術を受けた患者の情報より収集した。</p> <p>結果： 手術を受けた488名の患者のうち、113名(23%)は大きな結節性甲状腺腫があり、そのうち、43名(平均106g)は片側性、70名(平均173g)は両側性であった。のこりの375名(77%)は片側性で50gあるいは両側性で100gに満たない小さな結節性甲状腺腫があり、179名(平均18g)は片側性、196名(平均37g)は両側性であった。単回帰分析では、黒人・40歳以上・BMI30kg/m²以上・健康保険未加入が大きな結節性甲状腺腫と有意に関連しており、飲酒は有意な予防因子であった。多変量解析によると、黒人(オッズ比3.3)・40歳以上(2.1)・BMI30kg/m²以上(2.5)が大きな甲状腺腫の独立した有意な関連因子であった。</p> <p>結論： 黒人・肥満・加齢が大きな結節性甲状腺腫の独立した関連因子であり、早期発見によって腫大化やその後の重篤な症状を予防するのに役立つものと考えられる。</p>	